

仮面劇による戯考

永 柴 孝 堂

幼稚園及び保育所の年中行事の遊戯会（最近では「生活発表会」という所が多くなった）プログラムの中で、仮面劇というものを時々見ることがある。

画用紙にクレヨンで思い思いの顔を描いて、それを切り抜いて面を作り、ゴムバンドで頭にとめて、幼児が劇をするのである。

その面の顔は、ほとんどが動物である。その動物から受ける童話的印象によって、善悪、強弱、大小、それぞれの役割を定め、ストーリーに合わせて演劇するのである。

面をかぶっている登場者は、発声しない。

劇の推移は別の児達が説明する。又は職員が適当に童話する調子で、物語りしていく方法もあった。

伴奏は職員がピアノでつけることもあるが、レコード応用が圧倒的に多いようである。ことにテープレコーダーというありがたいものがある今日、これ等をフルに利用する向きがふえてきている。

この仮面劇の雰囲気というものは、他の発表種目とくらべて、出演者の幼児達が、伸び伸びと活き活きとした態度で、ステージの上を縦横に活動しているように見えるのである。

仮面劇と子どもということに、何か特別な近い結びつきといったものをいつも考えるのである。

× × ×
 現今ではほとんどこの機会はなくなったが、私等の幼少時には、氏神さまの祭礼にあって、神社の神楽殿で行なわれる、神代神楽をよく見たものである。

顔一面ひげのスサノオノミコトが、おきな面のテナヅチアシナヅチから事情をきき、白いうりざね顔のクシナダヒメに安心を与え、ヒヨットコ二人に酒を作らせヤマタノオロチの出現を待って、いよいよクライマックスのオロチ退治の大活劇に至る。そのすべてをはっきりと思い出すことができる。

中でもヒヨットコ二人の横腹の痛くなるようなコッケイな動作や、思わずいきを呑んだヤマタノオロチの恐しさを今も忘れることができない。

また初午の日。町内の稲荷さまのおまつりには、子ども仲間が不規則に打鳴らすタイコの音に合わせて、キツネの面をかぶって、文字通り我を忘れて、踊りまわったのしきはほのぼのとしたなつかしい思い出として残っている。

話はとぶが、当時の上野山の花見には、多くの酔客が「目かづら」という、鼻から上をかくす仮面をかぶって、漫歩したり踊ったりしている姿をよく見うけた。

それにこの「目かづら」は、花見の場の露店で売られていて、種類はたしか五・六種あったように覚えている。

そういえば現今有名地方行事になっている「博多どんたく」では、この「目かづら」のような半分のお面を顔へつけて行なわれている図を見るのである。

この「目かづら」は、顔の下半分つまり口の所が全然おおわれていないので、自由自在に口をきくことができる。

これは神代神楽等で使われてきた「お面」というものとは、発生とか用途とかいろいろな点で本質的に別のもののように思われるので、いつかじっくりと調べてみたい。

神代神楽にしても、初午にしても、お花見にしても、数十年経っている今日まで、かくもハッキリ記憶に留まっているということは、これらの主眼となった「お面」の魅力ではないかと考えられてしかたがない。

そういえば現在もオモチャ屋の店頭に、数は少なくなったが縁日や、お祭りや、又は行事日に出る露店に、ピストルや機銃のようなけしからぬ玩具の中に交って、プラスチック製のお面（昔はセルロイド製で危険であった）が相も変わらず、子ども達の人気をよんでいる。

私の幼少時は、おかめ、ひょっとこ、てんぐ、鬼、般若、外道、乃木大将、陸海軍の兵隊さん、美少女等とても枚挙にいとまないほど、多種多様なものがあって大いに子ども心をたのしませてくれた。

昭和初期には、街頭紙芝居で有名になった「黄金バット」という金色のガイコツのお面がとてもよく売っていた。今日では、鉄腕アトム、鉄人28号、怪人ロボット、月光仮面、オバQ等々、連続マンガやテレビの人気者が顔をそろえている。

時代を超越して、桃太郎、金太郎、犬猿キジからタヌキ、ブタ等、童話関係のもの「永遠のいのち」というものを楽しみじみと感ずるのである。

現代っ子はこのお面をどんなふうに使っているかはよく知らない、が、子どもの生活とお面という関係には、なみなみならぬものがあるようである。

別格として「てんぐ」がある。

赤くて鼻の高いもの、青いカラス天狗といったもの等。

これらは、子どもの世界から離れて、大人の中で宗教的な立場を確保している。

「天狗の面」については、これは民俗学の空気が濃厚となるので、全く場を変えて、ゆっくり考えてみたいことがある。

×

×

×

たまたまあるものの本をたずねた時、大凡ではあるが、人間がどうして「面」というものを工夫したかを知ることができた。

太古の人間が、絶対の対象つまり神や悪魔を考え出して以来『おそれ』というものを強く意識するようになった。

(この「おそれ」の悪い代表的なものに、病氣と死があった)

もったいないものやおそろしい対象の前へ出ると、思わず顔を伏せてにげるような態度をしばしばとらざるを得なかったが、そう逃げきれぬものではなかった。

人間は、止むを得ずテノヒラで顔をかくした。両方の手なら尚更能率的であった。

もっと智恵が進んで、木の葉で顔をかくすようになった。

つまり相手が見えないので、向うからもこちらがわからないであろうという、大きな安心感であった。

ここで「面」に近いものが案出されてからは、おそれおのくといった恐怖の感情が徐徐に救われていった。

人間達は「面」の工夫製作に頭をしぼった。木のセイヤカワはよく用いられた。布ができるようになってからは、布で顔をおおって「布面」といったものも考え出された。

眼の部に小さい孔をあけて、相手が見えるように進歩した。

面をかぶることによって、神や悪魔に平然と対せるようになってきた。

また人間は、神や悪魔の面相というものを創案すると、そのような「面」を作って、それを顔につけて自分自身がそのものに成りきって神意その他を相手に伝える。というところまで発展してきた。

更に、神事を一般にPRするために、善悪それぞれの「面」をつけて劇表現して観せた。(後世仮面劇の場合。東洋では無言、西洋では発声の方式を生んだ)とある。

× × ×

仮面劇や面神楽はセリフではなく、「面」の形やその色の美しさ、出演者の動作(フリ)に大きなおもしろさがあると思える。

少年時代の初午のキツネ面をかぶって踊ったことも、ただタイコのリズムにのって声は出さなかった。

神代神楽の登場者達は一言もコトバを発せず、その行動による表現によって充分に劇の意味の理解ができたのである。(ヒョットコが時時おもしろいことをいって笑わせたが、これは劇のムードのモチーフとして生きていた)

コトバにたよらないことに、コトバ以上のたのしさがあったように思われる。(我国最高芸術といわれる「能」にして思い当るものが多くある)

パントマイムのゼスチュアの芸術性や、仮面劇出演者の動作の重要性というものをあらためて考えるのである。

近来は生活にムダなコトバが多く、必要な言語が少ないような気がする。

マンガ物語が盛にもてはやされている。これは画の動きが主で、よけいなコトバにたよらない所がこの魅力ではないかと考えらる。

ある洋行者は一言も先方の国語を使わず、(止むを得ない所だけわずかに筆談して)あとは全部ゼスチュアでおしとおしたそうである。自己の心情や人間性をすなおに相手に伝えたのは、コトバ以前にある「心」の表現行動にあっ

たものであろう。数多いコトバにたよりすぎている無表情な日本人の話し方と、コトバと感情を豊かに表情で快適に表現している西洋人とをくらべると、今更うらやましいような気もするのである。

×

×

×

幼児の行なう仮面劇を見るたびに、私は（ことに言語をもって業としている者として）自分の意志を相手に伝える手段として、ただコトバだけでなく、言語以前にある「フリ」というものをもっと学ばなければならぬと、痛感するのである。